

# ジョホール日本人学校での保健体育的な活動

前ジョホール日本人学校 教頭

秋田市立金足西小学校 教頭 町本 康克

キーワード：保健体育学習，体育的活動，学校における健康診断

## 1. はじめに

ジョホール・バルは、マレーシア半島の南端で、1 km弱のコーズウェイでシンガポールと結ばれているところである。北緯約1度、熱帯雨林気候で乾季と雨季に分かれるが、年中最高気温が33～4度という中で生活をする。隣国のシンガポール日本人学校に毎日パスポートを持参し通っていた児童生徒の負担を軽減してほしいという保護者の願いが大きく、1997年4月にジョホール・バル郊外東部約20kmのスリアラム開発地に在マレーシア日本国大使館の付属日本人学校として開校した。当初は、大家であるスリアラム社の事務所を間借りしていた。2年目からは借地借家ながら、約2万平方メートルの敷地に校舎を建て現在に至る。今では、図書室、パソコン室、プールの施設等も整備されている。2008年で創立12年目を迎える。

児童生徒数は130～140名くらいで推移、小学部低学年が最も多く、学年が上がるにつれ、人数が少なくなっている。中学部は30名前後である。学校所有バス2台、委託バス4台の合計6台で登下校をする。水道は飲料水として利用できるくらいのものであるが、念のため毎日水筒を持参している。飲む水がなくなると学校内にあるウォーターディスペンサーから水筒に補給する。

## 2. 保健体育的環境

### (1) 施設

体育館、グラウンド、プールがある。体育館は、コンクリートにフローリングが施されたものであり、日本の体育館のような弾力はない。グラウンドは、2007年9月に芝生の張り替え工事を行ったが、グラウンド専門の業者ではなかったためか、水平レベルや芝の緻密さにやや難点が見られた。プールは、深さ・広さに関しては人数的に十分で、25m×11mである。プール底に循環のための丸い排水溝が10箇所くらい設置されていた。ただ、金属の形状のせいで足をけがする場合があったので、これからも注意が必要と思われた。水質管理は専門の業者が行っていた。私が赴任する前に、プールでネズミが死んでいたことがあったこともあり、衛生的な水質の中で水泳授業を実施するため3年間毎朝プールの状態を観察し、異状がないか確かめた。



〈運動会での徒競走〉

### (2) 保健行事

身体計測は、年3回実施している。内科健診は、当地で医院を営んでいる医師にお願いしている。福島県立医科大学を卒業した中国系の医師である。日本語が堪能で、ジョホール・バルで唯一日本語で対応できるので、安心して受診することができる。学校医にもなっていていただいている。

歯科健診は、シンガポールの歯科医院から医師を派遣していただいている。ボランティアの申し出があり、送迎

は学校で行っている。医師は、マレーシアの医師の資格も持っている。歯科衛生士は、日本人が勤めているので、健診が終了した後は歯磨きの仕方を重視した「歯科衛生指導」も行っていた。2年くらい前からはその指導されたことを生かすために、昼食後の歯磨きを行うようになった。はじめは歯磨き用具の持ち帰りなどの関係から定着しなかったが、意欲喚起のためにカードを使ったり、歯磨きを促す放送や音楽を流す取り組みをしたことによってだんだんと定着してきている。長期休業中もカードを使って歯磨きを励行している。

聴力検査は、オーディオメーターがないので購入を希望したが、学校運営委員会で賛同を得られず、業者に委託して実施している。コンテナ型のトラックに2室の検査室が設置してあり、検査員がそれぞれいて順次入って行って検査する。一人あたりの費用が安いのがメリットであるが、学校の希望どおりの日時で実施できるかが課題であった。

### 3. 体育的活動

教育課程は日本の学習指導要領に沿って編成されている。体育科の内容は、日本のそれと変わりなく、学習活動も同様である。体育用具はある程度備えられているが、これも年次計画にて徐々にそろえられたものである。

気候の特性から年間活動計画に毎月「水泳」を盛り込んでいた。しかし、年間指導計画に占める割合は20%を超えないようにしていた。「自分の命は自分で守る」ように着衣水泳も実施していた。6月に運動会があったので、それまでは体操や運動会の練習が主になるが、その後は指導計画に沿って陸上運動、ボール運動、器械運動に取り組んでいた。時数の関係から表現運動は運動会でのダンスに代替、武道は施設用具の関係から実施していない。

体育的な活動を行う上で重要なのは、「熱中症」対策である。水分補給と運動時間の調整、屋外では帽子の着用を徹底することであった。体育館の構造も日本のような窓の開閉はできないので、風通しがあまりよくない。扇風機や強制的な通気口があったが、それでも空気はこもりがちであるので、気を付けなければならない。屋外では直射日光に気を付けなければならない。特に2～3月は紫外線が強い時期といわれていたので、帽子をかぶることを徹底した。体育の学習時には、水筒を活動場所に持って行って水分の補給をさせるようにした。

昼休みには、期間限定で器械運動の技能の向上を目指して「マット・跳び箱週間」と銘打って自主的に取り組んだり、「ドッジボール大会」や「縄跳び大会」などを開催したりした。これらは教師が支援しながら委員会の活動として行った。

児童生徒が体を動かしながら、自然な英語に触れられるようにすることをねらい、体育科の授業においてイメージ教育を推進しようとした。体育を指導する教師とのTTでの指導を行った。2年間続けて行ったが、次のような課題があり、断念せざるを得なかった。一番の大きな理由は、講師選定の困難さである。現地採用教員であるが、適した人材が得られにくいことであった。

### 4. 部活動

小学部ではかつてサッカーの好きな派遣教員が放課後自主的に指導していたということであったが、学校として部活動を指導することになった。

学校生活において児童生徒が運動をすることができるのは、体育科、朝の始業前、休憩時間、放課の時間である。児童生徒は、下校後はコンドミニアムの中で生活し、安全面の関係からコンドミニアム内の施設でしか遊んだり活動したりすることができない。ジム、プール、テニスコート、ちょっとした遊具などの施設である。学校内にも遊具がいくつかあり、小学部の児童はすぐに遊ぶ、中学年の女子児童には一輪車が人気、男子児童や高学年～中学部ではサッカー、キャッチボールなどをしている姿がよく見られた。

このような状況の下、「放課後の有意義な時間の活用」「心身の解放や鍛錬」「物事に打ち込む気持ちの充実」をねらい、たくましく育ててほしいという保護者の願いも重なって希望制で部活動を行っている。

小学部は、サッカーとソフトボールを各週1回ずつ実施、活動日をずらすことによって希望者はどちらにも参加が可能とした。中学部は、当初男子がバスケットボール、野球、サッカーと変遷してきたが、現在はサッカー部として活動している。女子は当初からバドミントン部として活動してきている。どちらも週4回の活動を行っている。

小学部、中学部とも国際交流という行事でのスポーツ交流や、地元の学校との交流試合を行っている。サッカー部に関しては、マレーシアでも盛んに行われているので、対外試合を行う機会があったが、ソフトボールに関しては部内で練習試合をしたり、教員チームと試合をしたりするなどして活動意欲を喚起した。バドミントン部は、地元中学校との交流試合、保護者で同好会的に行っている方々や教員チームにお願いして試合をする機会をもった。野球部が組織されていたときは、シンガポール日本人学校や日本人で組織するクラブチームと練習試合を行うことができ、うれしい経験をさせていただいた。現在のサッカー部は、小学部、中学部ともシンガポールでの日本人会や企業主催の大会があるので、国境を越えて大会に参加している。



〈ラーキンスタジアムでの中学部サッカー部〉

部活動の課題として、バス通学のため限られた時間内での活動であること、種目による継続性（指導者や児童生徒の興味関心）、予算と活動場所の問題がある。気候的に突然の激しい雷雨があるからである。毎年、いくらかでも児童生徒が楽しく部活動に参加できることを願って検討を重ねている。

## 5. 学校外での運動環境

学校とは別に、保護者や日本人会の有志が中心となってクラブチームを組織している。小学生対象の「JBライオンズ」というソフトボールチーム、「JJFC」というサッカーチームがある。小学生を指導するために集まった保護者がさらに中学生以上の大人チームを結成して運動を楽しんでいる。

日本人会主催のソフトボール大会やテニス大会、ゴルフ大会などがあり、大人が対象であっても中学生も参加して楽しんでいる場合もある。

## 6. 教頭としてのかかわり

教頭の業務内容に、学校運営費の教科教材費、学級・クラブ費の執行がある。体育科に係る教科教材費、部活動に係る学級・クラブ費をいかに効率よく有効に活用できるかが課題であった。体育用具・用品は大きいものが多く、重さもあるので、簡単に日本から取り寄せるわけにはいかなかったので、できるだけ海外子女教育振興財団の教材整備の配分予算で整備し、消耗品的なものを学校予算で購入するようにした。そのほか現地で調達できるものを探したり、部品となる部材を購入して手を加えて使用できる教材に仕立てたりして予算オーバーにならないよう気を配った。